

町田の菩提樹



町田の菩提樹



町田の菩提樹

親鸞聖人にまつわる伝承や伝説が茨城県内には数多くあったようだ。しかし、情報化社会と呼ばれる現代、皮肉にも情報の波にもみ消されるかのように、それらの多くは人知れず忘れ去られている。

今回、我々が訪れたのは、旧水府村役場（現水府支所）のほど近く、町田町の親鸞聖人お手植えと伝えられる菩提樹で、この伝承を詳しく知る人はなかった。

その様な中、常陸太田市郷土資料館の『梅津会館』でお話を伺い、数少ない資料を頂いた。その中の『水府村史』（村役場 1971 年発行）を見ると「この一帯を地元では通称「ぼだい」と呼びならわしている。古老たちの話しによると、ここは昔、あるお姫さまが 5 人の従者ととも自害したところで、この菩提樹は、ある旅僧が、お姫さまや従者たちの菩提を弔うために植え遺したものだ、と言い伝えられている」とある。早速、頂いた地図をたよりに現地へ赴いた。

常陸太田市街から大子へつながる県道を北上し、水府中学校の 400 メートルほど手前、右側に「町田焼跡・菩提樹」と書かれた緑色の案内板がある。そこから県道を右手に入り約 400 メートルで「町田焼窯場跡」がある。さらに 200 メートル沢沿いに登った田圃の土手に塚があり、そこに菩提樹の古木があった。近くには説明板があり、平将門ゆかりの

姫が奥州に逃れる途中、この地で自害し、親鸞聖人がこの地を訪れたとき、姫たちの菩提を弔うため植たと書かれている。きっと地元では最近まで、そう語り継がれていたのだろう。

塚の上に登ると、根本の幹周りは 2 メートルほどもあり、枝も空を覆い尽くすほど広がっている。菩提樹にしてはかなりの巨木だ。また、根元のわきには小さな祠ほこらが二つある。枝に残る菩提樹の実を探してみると、葉脈から枝のようなものが伸びて、その先に小さな実を付けていた。実の付き方が鳥栖の無量寿寺にある親鸞聖人お手植えの菩提樹と同じで、中国原産の品種のようだ。ともあれ菩提樹は、インドと中国が原産で、日本には自生していない。このことから考えて、人の手によって、この地に植えられたことは間違いないだろう。

菩提樹の「菩提」とは本来、煩惱の迷いから目覚め、悟りを得ることで、人間の完成を意味する。そして、お釈迦さまは菩提樹の下で悟りを開かれたと伝えられ、本名を畢鉢羅樹ビツバラという。

この町田にひっそりとたつ一本の古木の言い伝えを聞いたにすぎないが、親鸞聖人と土地の人びとの交わりの痕跡を感じることが出来た。